

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教育学)	氏名	小 西 恵 子
学位授与の要件	学位規則第4条第1・②項該当		
論 文 題 目			
黒表紙教科書から緑表紙教科書へのカリキュラム移行期における後期生活算術運動の影響 —香取良範の算術教育に焦点を当てて—			
論文審査担当者			
主 査	教授 植 田 敦 三		
審査委員	教授 小 山 正 孝		
審査委員	教授 松 浦 武 人		
〔論文審査の要旨〕			
<p>本研究は、大正11年から昭和9年にかけて展開された生活算術運動を前期（大正11年～昭和5年）と後期（昭和6年～昭和9年）に区分した上で、黒表紙教科書から緑表紙教科書への移行過程における後期生活算術運動の緑表紙教科書への影響を明らかにすることを目的としている。</p> <p>本研究の研究課題は、次の4つである。</p> <p>〔研究課題1〕黒表紙教科書のカリキュラム構成原理を明らかにするとともに、その実践的課題を明らかにする。</p> <p>〔研究課題2〕黒表紙教科書が抱えていた実践的課題を、前期生活算術運動期の算術教育がどのように改善しようとしたのかを具体的に考察し、この改善に向けた取り組みから生じた新たな課題を明らかにする。</p> <p>〔研究課題3〕前期生活算術運動の課題を後期生活算術運動がどのように改善を図ろうとしたのかを、当時の代表的実践家の取り組みを事例として分析する。</p> <p>〔研究課題4〕緑表紙教科書のカリキュラム構成原理を分析した上で、黒表紙教科書から緑表紙教科書への移行過程を後期生活算術運動の影響という観点から検討する。</p> <p>本論文は、序章と終章を含めて6つの章からなり、各章を概括すると以下ようになる。</p> <p>序章では、本研究の主題と目的、及び方法について述べ、本研究における時代区分と、黒表紙教科書から緑表紙教科書へのカリキュラム移行過程における算術教育運動の関連性を示している。</p> <p>第1章では、国定算術教科書の編纂に大きな影響を与えた藤沢利喜太郎の算術教育論を当時の教育思潮、教授学、及び同氏の算術観に焦点を当てて分析することにより、黒表紙教科書のカリキュラム構成原理を導出し、学んだ算術的知識を児童が日常生活に活用できないという黒表紙教科書の実践的課題の背景として形式陶冶説が潜在していたことを明らかにしている。</p> <p>第2章では、大正期にわが国で展開された形式陶冶論争の概要、特に算術教育界における対応の実際について考察することにより、児童の数量生活の向上発展を目的とした実用主義、経験主義に立つ前期生活算術運動の取り組みの実際を明らかにするとともに、学習</p>			

系統の構成に関する実践的課題が生じていたことを指摘している。

第3章では、前期生活算術運動が残した算術学習の系統性に関する課題に取り組んだ後期生活算術運動期の実践の特質を成蹊小学校の香取良範を事例として分析している。香取の算術教育実践は前期生活算術運動の成果を継承しながらも、数理思考の向上発展という算術の人格的価値の認識に立つものであり、開発された算術カリキュラムは生活と数理の往還関係に基づく一般化の過程により構築されていたこと、その背景にはカント的批判哲学を理論的基盤とする篠原教育学の影響があったことを明らかにしている。

第4章では、前章までの考察に基づき、香取良範の算術カリキュラムと緑表紙教科書との関係性について検討することにより、後期生活算術運動期に展開された実践が国定算術教科書に及ぼした影響について分析している。

終章では、黒表紙教科書から緑表紙教科書へのカリキュラム移行過程を後期生活算術運動期の算術カリキュラム開発の影響として全体的に記述するとともに、今後に残された研究課題を明らかにしている。

本研究は、次の3点で高く評価できる。

(1) 民間の生活算術運動を前期と後期に区分することによって、黒表紙教科書から緑表紙教科書への移行を過程として説明する枠組みを示したこと

従来の算術教育史研究においては、生活算術運動は様々な特徴的実践の総体として取り扱われ、黒表紙教科書から緑表紙教科書への移行に対する生活算術の影響は漠然と語られがちであった。本研究では、形式陶冶論争に端を発する算術教育実践を、実用主義、経験主義に基づく数量生活の向上発展を標榜した前期生活算術運動と、算術の人格的価値としての数理思考の向上発展に着目した後期生活算術運動とに区分することより、黒表紙教科書から緑表紙教科書への移行を過程として説明する枠組みを示している。

(2) 黒表紙教科書から緑表紙教科書への移行を後期生活算術運動との連関過程として捉えることができることを、香取良範の算術教育実践を事例として例証したこと

従来、不連続なものとして個別に記述されてきた黒表紙教科書と緑表紙教科書との関係を、香取良範の算術教育実践を後期生活算術運動の代表的実践事例として位置づけることで、国定算術教科書の移行過程を連続的なものとして記述できる可能性を例証している。それにより、国定算術教科書の移行過程に関する今後の新たな算術教育史研究の視角を与えている。

(3) 後期生活算術運動期の代表的実践家である香取良範の算術教育の全体像を明らかにしたこと

成蹊小学校の香取良範は生活算術運動期の実践家としてよく知られた存在ではあるが、これまで香取良範の算術教育論が算術教育史研究の対象とされることはほとんどなかった。本研究では、従来言及されることがなかった教育思想的背景に言及することにより、香取良範の算術教育実践の全体像を明らかにしている。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成31年2月12日